

奄美文化誌 ～ 南島の歴史と民俗 ～

長澤和俊 編 西日本新聞社 発行

(昭和49年10月)

3 つきめ(匏行性角膜潰瘍)をケンモンに突かれたとし、ムヌシリにクチ(呪文)を入れてもらった水を吹きつける。(注IIケンモンは河童に似る妖怪)

6 齒痛み ムシバで齒が痛むとピラヤキ(蕪焼き)する(前出)ほか、エーバリ(焼針)と称する針で患部を焼く。ムシバでなく齒根の痛みをチバ(血齒)といい。肩から血を取る。

7 クサ(フィラリヤ) クサブレイを血統と信じ、発熱して痲痺を起すと布団を何枚も被せて寝させるだけである。数時間経つと熱が下るから再び仕事に出る。

以上のほか、詳しくは「奄美生活誌」参照。(恵原 義盛)

## 10 民俗芸能

### ——民謡——

#### 1 奄美民謡の分類

奄美の唄は、いつ、どんな機会にうたわれることが多いであろうか。これに答えるために、まず大雑把な奄美民謡の分類案を示してみたい。

#### 1 あそび唄(慰みのためにうたわれる唄。ウタアソビの席でう

にすぎないことを理解いただきたいと思う。

ところで今日の奄美民謡の主流はといわれれば、やはりあそび唄と、行事唄の中でも八月踊り唄をあげるのが最も妥当であろう。本稿においても、その二つの流れの唄を中心に、奄美民謡の世界を垣間みることにしたい。

#### 2 あそび唄と八月踊り唄

ウタアソビとは言葉どおり唄をうたって遊ぶことに他ならないが、結婚の祝宴とか、家作りの祝いなどがそのまま、いつとはなしにウタアソビになってしまう場合が多い。むろん、とりたてた目的がなくとも、三味線一挺手もとにあり、人が二三人寄せれば自然始まるというの、南の島のウタアソビの特長といえる。一昔前までは女童(娘)達のヨナベ仕事の場に、三味線を手にしたニセ(青年)達があらわれ、仕事などはそっちのけで、夜の明けるまでうたい興ずることも多かったという。

分類案にも示したが、あそび唄の大半(奄美民謡の大方といってよい)は、もともと誰かがうたえば、他の人達がそれに静かに耳傾けるというよりは、一人がうたえば、もう一人がそれに答えるといった、いわばカケアイでうたうようにできているから、一晩中でも途切れることなく、アソビを続けることが可能なのである。

○遊ば夜ぬ浅き 宵と思めば夜中  
島唄と思めばなゆや明けそ

(遊びをする夜の短いことよ。また宵の口だと思ったら、もう夜中、今、鳥が鳴いたと思ったらもう夜明けだ。)

たわれる唄。三味線を伴奏とするので三味唄といってよい。)

○掛けあいであたわれる唄——あそび唄の大半

○独演形式の唄——口説、数え唄の類

○踊りの伴う騒ぎ唄——天草、六調など

2 行事唄(年中行事ないし家の行事に係わる儀礼的な唄。)

○年中行事に関する唄——正月唄、餅もらい唄、八月踊り(または七月踊り)唄、虫あそび唄など

○個人的な行事や儀礼に関する唄——誕生祝い唄、婚礼祝い唄、建築祝い唄、送別唄、葬式唄、三十三年忌送り唄など

3 仕事唄(これに当る唄は、今日はほとんど見当たらないが、かつては少なくなかった。総称し、島の言葉でイトウという。)

○農耕に係わる唄——田植唄、稲摺り唄、麦打ち唄など

○海の仕事に係わる唄——舟こぎ唄、鳥賊曳き唄

○山の仕事に係わる唄——木を引きおろす時の唄、椎の実拾いの唄など

以上のようになるが、といって、すべての唄が、この分類のどこかの範囲にスッキリ収まるのかといえば、そうとは限らない。例えば「田植唄」一つとってみても、仕事唄としてよいのか、儀礼的な行事唄としてよいのか、なかなかむづかしい問題である。

それとまた、個々の唄の系譜をたどっていくと、かつては一仕事唄であったものが、三味線がつけられてあそび唄に変身したものや、普通のあそび唄が、何かの理由で行事唄に流用されるというケースも非常に多いのである。従ってこの分類案もあくまで一つの目安

○こぬ遊び立てて 家から戻らゆめ

明日ぬ太陽がなし 上がる迄む

(この遊びを始めて、今頃家に戻られようか。明日の太陽が上るまでは、この遊びを続けよう。)

こうした唄の文句は、かつてのウタアソビの一面をよくいいあらわしている。

このように島のウタアソビは、いつ、どこでも、気のおもむくままに行われる一種の慰みといえることができるが、八月踊り(一部では七月踊り、浜踊りなどという所もある)となるとその趣きもかわってくる。

今日、この踊りが残っているのは大島本島、加計呂麻、喜界、徳之島のほぼ全域である。

七、八月というのは一期作時代の奄美ではちよと米の収穫期に当り、一年の折目(正月)と意識される季節であった。その頃に当然のことながら、いろいろな行事が集中して行われるが、それらの行事に欠くことのできないのが八月踊りなのである。

この踊りも、一部の専門家によって踊られ、一般の人々は、ただ見て楽しむというような本土の芸謡的なものとは違う。部落の老若男女が集い、とりたてた衣裳をつけるのでもなく、普段着で踊られる。

この時、その踊りのグループが、部落中の家を一軒一軒回り回るといっても、古風をとどめた大きな特長といえよう。(現在では、どこか一カ所で踊る所が多いが。)そこには神繩諸島のアンガマ行事や、ミロク踊り、あるいはエイサー踊りなども系統を一にした来訪神信仰の姿がうかがわれるのである。

この八月踊り唄のレパートリーは部落によって三十を越す所や十位の所といろいろであるが、実際にどのような形であつたわれるのかをみてみると、その第一の特長は、踊り手、すなわち唄い手だということ。そして、これらの唄もあそび唄同様、男女のカケアイですめられるということである。先にも述べたように、これは集団の唄であるから、統率者がいないと唄がバラバラになってしまう恐れがある。そこには、男女各々に首頭取り格の人(大島本島では唄出し部、徳之島の一部では音取りなどという)がいて、この人たちが唄の最初の文句をうちだせば、あとの人たちが、それに合わせて後を続けるというのが普通のものである。近年は歌詞の順番を固定させてしまつて、それにのつとつて男女がウタカケするという部落が多いようであるが、かつては即興的にその場の雰囲気や唄のやりとりをやつたことはいまでもない。

以上、奄美民謡の代表ともいうべき、アソビ唄と、八月踊り唄についての素描を試みたが、両者の成り立ちや、交流の姿については今日なおほとんどいってよいほど明らかになっていないといえぬ。すでに述べたように、ウタアソビの唄は、カケアイとはいえず、一人一人の唄である。一方、八月踊り唄は集団によるカケアイ唄である。また、それぞれの伴奏楽器をみても、あそび唄はもっぱら三味線で行われ、八月踊りは太鼓で行われる。おのずから、あそび唄は節的で、洗練された感じを与え、後者は動的で、原始的な感すら与える。ただしそれは、奄美における唄心(音楽性)の両面を端的に表わすものだといつて誤りではなからう。

のごとく、前の唄の文句の一部をとるだけで、前の唄とは全然別の世界を作つてしまう場合もあるのである。そしてこれ以降も次々と、その場、その場に応じた歌詞がつづけられていくわけであるから、「らんかん橋節」という唄全体に流れる内容というものは、ほとんど存在しないのだということが、これでお分りいただけると思う。従つて奄美民謡において唄の内容という場合、けっきょく一つ一つの歌詞の意味、内容ということになつてしまふ。

誰がいい始めたか詳らかではないが、奄美民謡は一説に百五十曲三千首(歌詞の数)ということがよくいわれている。私もまた、その確認はしていないが、それほど誇張でないことはたしかである。問題は、その内容であるが、ざつとみても、あいさつ唄、教訓の唄、旅の唄、恋の唄、それに世間の出来事や、噂話をうたったものと、さわめて多彩である。まず、あいさつ唄から紹介していこう。

1 あいさつ唄 古老達の話すところによると、かれらの若い頃までは、玄関先でのあいさつも、唄でとりかわすといつた雰囲気がある。かなり濃厚に残つていたようである。今日でも、こうした傾向は全くなくなつてしまつたわけではなく、ごく普通のウタアソビでも、しかるべきあいさつ唄をうたうことから始められる。

例えば、大島本島、喜界島などでは「朝花節」という唄が、そうした種類の唄であるが、例えば、この唄にのせて主人と客との間での次のような文句が交わされる。

(主人)まれまれ汝きやば拜で 今汝きやば拜めば にや何日頃拜むかい。

(あなたには久しぶりにお逢いしました。今、あなたにお

さて次に、あそび唄と八月踊り唄では、どんな内容の唄がうたわれるのかということを見てみることにしたい。

そこで、まず断つておきたいのは、あそび唄でも八月踊り唄でも個々の唄自体は一貫した内容を持ち得ないということである。なぜなら、カケアイ唄だからである。つまり、カケアイというのは、お互いが一つの節まわしを媒体にして、知恵を絞り合いながら唄問答をするということであるから、どんな内容の歌詞が飛びだしてくるか分らず、一貫した内容を持ちたくとも持ちようがないのである。

例えば「らんかん橋節」という一つのあそび唄の場合、その打ちだしの歌詞(元唄)は、

○大水ぬ出して らんかん橋流れ流らち

忍で来る加那や 泣ちど辰る

(大水が出て、らんかん橋が流されてしまつた。そこまで忍んで来た恋人も泣く泣く戻つて行く。)

と決つてはいるが、その次にうたう人は、

○大水ぬ出して 渡ららぬ時や

情橋掛けて 渡ち給れ

(大水が出て渡れない時は、情の橋をかけて、渡して下さい。)

○大水ぬ出て さい 手袋洗れ流らち

磯者ぬ刀自や 泣ちど辰る

(大水が出て、サイヤタナガ八川エビの類Vが流されてしまつた。それをとりに行つた漁士の妻が泣く泣く戻ってくる。)

逢いすれば、今度は何日またお逢いできるでしょうか。)

(客) 突然出て 憚りながら ご免下さりませ。この家のお父主様

(突然お邪魔して、憚りながら失礼をお許し下さい。この家のご主人様。)

(主人)いもちゃん人や真実あらめ 石原踏み切ち いもちゃん人や真実あらめ

(おいで下さいましたことこそ真実のある証拠、こうして石原を踏み越へて、いらつしやいましたことこそ。)

また、この朝花節でよくうたわれる文句に

○節子ぬとみ貰らてくれれ 正月着や芭蕉着着ちも 節子ぬとみ貰らてくれれ

(節子八地名Vのとみを、あなたの嫁に貰つて下さい。例えばあなたが、粗末な芭蕉布で織つた正月着物をつけるような辛抱をしても……)

というのがあるが、これなどはかつて節子部落のトミという名の知れわたつたウタシャが、どこかのウタアソビに招かれて、そこで座を湧かせるためにうたつた唄ではないかと思う。それが評判となつて、あちこちでうたわれるようになったものであろう。今日も、ちやっかりしたウタシャがいて「節子のとみ」を自分のことにすりかえてうたい、拍手かっさいを受けた人もいる。

ウタアソビのおしまいも、やはりあいさつで閉じられることが多い。

○くんままし別れかや かしがで懐ちかしやれば 別れうちや思め切らんど

(このまま別れになるのでしょうか。こんなに懐しければ、別れようにも思い切られませんか。)

とか、

○別れてや行きゅり 忘れてや給んな まねまね便り 持たち給れ

(別れては行きますが、私のことを忘れないで下さい。時々便りも持たして下さい。)

こんな唄をうたって、名残りを惜しむのである。

さて、八月踊りが部落中の家を一軒一軒回って歩く踊りであることは、すでに述べたが、この時のあいさつの唄も多く残っている。

例えば、

○おほこりどやゆる 果報しゃらどやゆり 来年ぬ物作りし 睦枕

(ありがたいございました。嬉しゅうございました。来年の物作りは睦が稲穂の枕となるくらいに豊作となりましょう。)

この文句などは、踊りの列が家の庭から出て来る時のものであるが、感謝の唄であると同時に、その家に祝福をもたらす唄だともいえる。

その他、結婚式での婿側と嫁側のあいさつも、もっぱら唄で行なわれた時代があったようである。今日、そうした機会にはまず会うことはないが、歌詞だけは記憶されている。

(婿側)今日ぬ良かる日に 息子貰れ受けて 今からぬ先やう 祝ばかり

(今日の良き日に、あなた様のいとしい娘を貰い受けて 当家ではこれから先、お祝いばかりが続きます。)

いくら思っても、なびいて来ぬ男への、あてつけの気持が含まれていくかも知れない。

○東れ立雲ぬ 行き別れ見れば 加那と行き別れ ありがごと

(明けの立雲が、昇り始めた太陽に立ち切れ、別れ別れになって行くのを見ると、恋人としばしの行き別れをするように見える。)

○東れ明がりや 月ど明がゆり 肝急がりみそち 道に立つな (東の明がりを見て、もう夜明けかとおっしゃいますが、あれは月の明かりです。そう急いで帰っては、やたら道に立たねばなりませんよ。)

その表現の妙は正に絶品というほかない。

奄美民謡において質的にも、量的にもこのように恋唄が豊富だという背景には、やはり若い男女が寄り集う機会であったウタアソビの存在を度外視できないと思う。事実、かつてのウタアソビは、恋のカケヒキの場となることがよくあったと、古老達はいうが、普通の会話体ではなかないようなことも、唄だから大胆にいえたのかも知れない。

3 物語唄 奄美民謡の大半は男女カケアソビでうたわれることを立て前としているために、曲目一つ一つが一貫した内容を持ち得ないということは、最初の方で述べた通りであるが、ここにカケアソビでありながら、物語唄もあるという事実注目してみたいと思う。このことについては、すでに十年以上も前に、島々の民俗芸能をつぶさに調査研究された本田安次博士が、「(奄美では)八八八六

(嫁側)今おせる思娘 笥の番 技持ちゆるがでや そしりや頼む

(今あなた様に差し上げる娘は、例えてみれば、まだ笥の番のようなもの。技を持った一人前になるまでは、どうぞあなた様に、お頼みいたします。)

何かしら、奄美の人々の心のゆかしさが、感じられはしまいか。

このように、ざっと見るだけでも、奄美民謡の中に、あいさつ唄の要素がかなり大きな比重を占めていることに気付くのであるが、これは本稿では詳しく述べることはできなかったが、唄に、霊力・呪力といったものを認める古人の考え方も大いに保わって来ると思う。

2 恋唄 数限りなくある歌詞の中で、どんな種類の歌詞が多いかといえは、それは、やはり恋唄であろう。

求愛の唄、恋人を待つ唄、恋人を案ずる唄、恋人との別れの苦しみ等をうたった唄等々その世界は多様である。

○愛しやん人や庭鳥卵 吾や親鳥なて 朝替うさとり欲しやぬ (愛する人は庭鳥の卵のようなもの。私は親鳥になって、朝から晩まで抱きつづけていたい。)

かなり強烈な求愛の唄というべきものであろう。

○側家戸や開けて 加那待ちゆる夜や 夜風やしげく 加那や 見らぬ

(家の横戸を開けて 恋人が来るのを待ったけど、夜風がひどく、とうとう恋人はやってこなかった。)

の琉歌調の抒情歌もうたはれてありますが、この島にも物語歌がありました。ただ、奄美の物語歌の特色は、それが一貫した譚歌風ではなく、一つ一つの歌の連作調であるということです。これはよそにはない珍しいことであります。「(奄美の旅)三十九年刊一五五」といって問題にされているところであるが、該当曲を具体的にあげてみると「かんつめ節」「塩道長兵節」「ちようきく女節」「うらとみ節」「(一名、「むちや加那節」「やちや坊節」「いんみやんみ節」などである。これらを見てみると、悲劇的な女性が主人公となっているケースが多いことに気づく。うたい始めは、おそらく唄でもって、かれらを供養しようという意味も込められていたのではないだろうか。

ここに、「ちようきく女節」という比較的知られていない唄を紹介しておこう。今から百年ほど前、加計呂麻呂於齊という所であった、ちようきくという女と、かつくに(活園)という男の心中事件をうたった唄である。事件の真相は詳しくは謎となったままであるが、かつくにの、ちようきくへの思いがかなえられず、ちようきく細にちようきくを待ち伏せて、短刀で無理心中をはかったと、一般にはいわれている。

○ちようきく女 何処かちがいもゆる ちようきく女 がつきよ 打ちが 伊古茂候かち がつきよ 打ちが

(ちようきくよ、何処へ行くのか、ちようきくよ。らつきよを打ち(掘り)に、伊子茂(地名)の細に行きます。)

○かつくん兄 何処かちがいもゆる かつくん兄 一道なりが 愛しやんちようきく女と一道なりが (かつくに兄さん、どこに行くのか、かつくに兄さん。一緒

の道だ。愛するちようきく女と一緒にの道だ。一道<sup>ちやうきく</sup>心中の意もある。

○ばつぐえぐわばつぐえぐわ 水汲で飲まらに ばつぐえぐわ 其処なんあろうが ツバぬ葉・芭蕉ぬ葉ぬ其処なんあろうが (おばさんおばさん、水を汲んで飲ませて下さい。そこにツバの葉や芭蕉の葉があるでしょう。それに水を汲んで。死に切れずに苦しんでいるかつくにが、たまたま通りかかったおばさんに水を乞うているところといわれる。)

現在「ちようきく女」に関して伝わっている歌詞はこの三首であるが、このあとまた何の歌詞をうたってもかまわないのである。

このほか、教訓の唄、旅の唄、仕事の唄についてもふれたいが割愛することとした。

以上、きわめて素描的に奄美民謡の世界を紹介してみたが、その真の豊かさを理解してもらうには、まだまだ、いくら語っても語り足りないことを一言申し添えておきたいと思う。

(お断り||本稿はすでに発表した小稿「奄美民謡の世界(民俗芸能四十一号)」を改稿したものです。)

(小川 学夫)

## 11 民話

雨が降ると奄美の子供たちには、高倉の下<sup>たかぐら</sup>の土間が絶好の遊び場になった。そして大人たちも縄をなったりする仕事を高倉の土間でするものであった。遊びにあきた子供たちは、昔話を知っている大



高倉になる遊び場の雨の日

人の周囲にむらがつて、昔話をせがむのであった。テレビもラジオもなかった時代、子供たちは、方言で話される昔話が唯一の娯楽であったから、手に汗を握りながら聞き耳をたて、また笑話には、大声で笑い、悲しい継子話には、話をする大人も、聞いている子供たちも涙をうつつらと浮かべながら聞くものであった。語す大人も、聞く子供たちもまた語られる話もおなじ話ばかりであったが、不思議なことに、話を聞いた

びに新鮮な情感にひたるのであった。おなじ口調でおなじ筋書の話が何回となく語られるので、聞き手である子供たちはその話の主人公の運命も話の結末もよく知ることになる。そして話は、いつとなく子供たちの脳裏に刻みこまれることになるのである。そして記憶力の才能のある者がこの話を覚えていて、また子供たちに話して聞かせるようになり、昔話が口伝えに承け継がれていくことになるのである。夜、寝つきの悪い子供たちのために添い寝をしてやる母親もまた昔話の語り手であった。睡魔と戦いながら母親から聞いた話。それは、子供たちの心に暖められて、その子供たちが成長してまた子供たちへ話をするようにになると、昔話は、立派に承け継がれていくことになる。

貧しい生活であっても、ふけゆく夜に枕を並べた子供たちに母親がしてくれた昔話の数々は、精神的に豊かな、甘い追憶となって、